

# 音楽科授業の模擬的指導についての実践と考察

藤田光子

Practice and Consideration about Simulation Guidance of Music Class

Mitsuko FUJITA

## I はじめに

教育の現場では、さまざまな多様性が求められ、また教員採用試験でも授業を模擬的に行うことが試験内容に組み込まれるなど、実践力が求められている。

小学校では学校事情によりさまざまであるが、音楽の授業は担任の教師が行う場合と音楽の専科の教師が行う場合がある。小学校では中学校のように教科担当ではないため、小学校の科目の一つとして音楽の指導も行っていくのである。小学校の教員を目指している学生は音楽の指導も他の教科と同様指導できるようにならなければならないのである。ここでは音楽科の教員の育成とは違い小学校を専門とする教員育成のための音楽授業に焦点を絞って本稿を進めていく。

まず実際に短大生は「このようにうたいたい」や「このように表現したい」というものはあり、教師としてそれを指導に移せるかだろうか。教員養成系の大学で先生から「音楽をどのように表現したいですか」という問いかけの経験のある学生は1名だけだった。<sup>1)</sup>とあるが同様に短大生に対しても同様に問いかけてみた。これまでの学校教育の経験から教師からの働きかけとして、「どのようにうたいたいか」、そのためにどうすればよいかという「問いかけ」があった

という学生はいなかった。どのように表現したいのか、また表現して欲しいのかとまどい、思考する、そして自身が経験したうえで実際に指導に移す。それらの経験は必要となってくるのである。児童に『思考判断し、表現するプロセスをあじわって』<sup>2)</sup>という方向を示すためには教師がまずそのようなプロセスを感じ表現し創意工夫する経験を持ち指導に生かすことが重要であろう。

また平成10年改定の学習指導要領も改訂からまもなく10年の時期を経て次の改訂への動きが始まっている。平成18年の中央審議会答申の審議経過報告において教育内容等の改善の方向として『音楽、図画工作、美術などにおいては、感性を高め、思考・判断し、表現するという一連のプロセスを働かせる力、主題を発想し、構想を立て、創意工夫をしながら創作活動を行ったり、作品を評価したりする力が重要である。』<sup>2)</sup>とある。そこで模擬的指導経験によって思考・判断の観点を見据え自身で指導経験を持ちフィードバックできるような実践を行う。小学校の教師を目指す学生達は実際には小学校実習で音楽の授業に関わるのが少ない。そこで、小学校の教師を目指す学生にはできる限り模擬的に音楽指導の経験をして、とまどいを感じ自らもこのように表現したいという経験を持ってもらいたい。また少しでも効果的に、自身の工夫された音楽授業構築をしてもらいたいと

考えている。そこで本稿では、「模擬的指導経験」に着目し、模擬的な指導経験の実践を取り上げ、今後の音楽指導の方向性を探っていくものとする。

## II 音楽教育学的側面から

小学校教員養成では小学校の専門科目として音楽科指導法を履修する。小学校の音楽科授業の指導という視点に絞って考えていくと、いわゆる音楽を専門とする教員というものではなく、小学校教育を構成する1部であるという理解は当然必要となってくる。

そこで小学校での指導内容の履修は当然必要であるが、それ以上に教師としてどのようにそれらのことを指導に移すのか、授業としてどのようにすすめるのか、またこれらの音楽はどのように表現するのかどう表現したいのかを常に考察し、研究しなければならないのである。しかし、学生は自身が音楽を指導される経験は多く持っているが、指導する経験はほとんどない。そこでこれらをふまえ基礎的内容の理解などを終えた上で、指導という段階にすすんでいく。『授業研究は教員養成段階からとりいれるべきであり、教科教育法の講義そのものを授業研究の対象とする。』<sup>3)</sup> (佐野1997) とあるが、授業研究は教師にとって最大の課題であろう。実際の授業のあり方を模索しつつ、子どもの前に立つ以前に模擬的指導体験は大に行うべきであると考えている。実習の中での体験は非常に有効であるが、音楽科という教科から考えていくと、3週間という短い時間のなかだけで、十分に指導を行うことは少ない。『実際に起こりうる課題をいくつか想定し、それに対する専門的な見地から手だてを学ばせていくことも重要である。一人をモデルとしてトレーニングしてみせることもありうる。評価しあうプロセスもふませる。』<sup>4)</sup> ということが小学校教員養成の音楽カリキュラム実践法としても掲げられている。いくつか実践を重ねているがさらにこれらを工夫し教員養成の場で学生の状況に即したプログラムを構成することができるであろう。それに

よって授業前に実際に指導にあたる以前にその体験をすることは、模索の期間を持つことができ、また授業研究を進めていく上でもさまざまに工夫をしてみるなど、彼らの今後の指導の指針を見つける手がかりとなるだろう。

## III 模擬指導の実践

初等教育科小学校幼稚園コース2年次に「音楽科指導法」とこのコースを卒業し専攻科へ進学した初等教育専攻2年の「教科教育演習」で模擬的指導経験を行うため模擬授業の取り組みを行っている。学生の状況の把握のため毎年4月に音楽に対する不安点、小学校の教諭への希望についてアンケート調査を実施している。その結果をもとに模擬的指導に関する計画を立て実施している。その後の学生の感想や評価をもとに考察し今後の方向性を探るものとする。

### 1. アンケート調査

#### 《調査1 平成16年度～平成18年度》

これまで3年間での小学校幼稚園コースの学生の音楽に関する不安点を音楽技術的内容(ピアノ・歌唱・器楽など演奏に関する)音楽理論的内容(音楽史・人名・楽典・楽曲について)授業指導的内容(学習指導要領・学習指導案・授業の進め方・指導の仕方)3点にまとめアンケートを実施。また希望として将来小学校の教諭になりたいかについても同様にアンケートを実施した。これらのアンケートにより学生が音楽に対してどのような点に不安を感じているか、また将来教師を希望しているかなどを把握することができる。

[表1] 実施人数

平成16年度	4月実施	44名
平成17年度	4月実施	39名
平成18年度	4月実施	44名

[表2] 3年間アンケート結果

〈平成16年度〉

不安点	%	
音楽技術的内容	54.4%	24
音楽理論的内容	54.5%	24
授業指導的内容	36.4%	16

小学校の教員になりたい	56.8%	25
その他	43.2%	19

〈平成17年度〉

不安点	%	
音楽技術的内容	66.7%	26
音楽理論的内容	61.5%	24
授業指導的内容	71.8%	28

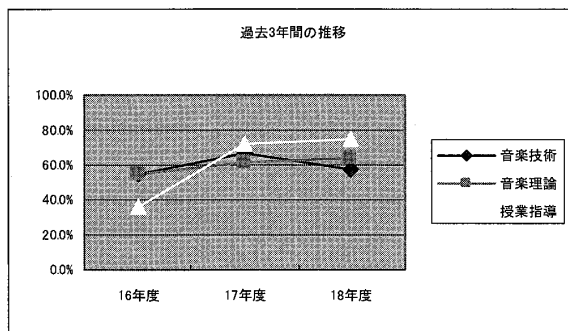
小学校の教員になりたい	51.3%	20
その他	48.7%	19

〈平成18年度〉

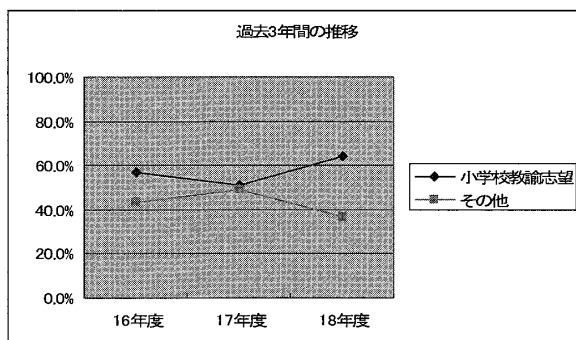
不安点	%	
音楽技術的内容	56.8%	25
音楽理論的内容	63.6%	28
授業指導的内容	75.0%	33

小学校の教員になりたい	63.6%	28
その他	36.4%	16

【グラフ1 不安な内容】



【グラフ2 小学校教諭志望】



【グラフ1】では教育現場に出るに当たって音楽科において不安を感じる点をたずねたところ、今年度は授業指導に関することがもっとも多かった。例年音楽の内容でもピアノや歌唱など実技に関することは不安点としてあげられて

いたが、ここ3年の推移としては授業指導における不安が最も多かった。この内容としては指導要領のことや指導案、実際の授業の進め方などである。またこの内容と呼応して【グラフ2】でわかるようにここ3年間では小学校の教諭志望がもっとも多い状況になっている。つまり、小学校の教諭になるという意思のある学生が、実際に教壇に立つ場合、やはり不安に思うのは授業のすすめかたや、どのように指導すればよいかという点に不安を多く抱えていると考えられる。これはおそらく指導するということの未経験からこのような結果が出ているのだと推察される。また他科に比べて実技経験や技能面での不安と重複して、指導に当たれるかという不安が表出しているものともいえよう。これまでの音楽的基礎知識とこれからの音楽指導の結びつきを重ね合わせることが重要であろう。

## 2. 初等教育科小学校幼稚園コース2年の取り組み

年度	内容
平成16年度	音楽科学習指導要領を学習 グループに分かれ、模擬指導を行うための学習指導案づくり 代表者による模擬授業
平成17年度	音楽科学習指導要領を学習し グループに分かれ、模擬指導を行うための学習指導案づくり。 グループ内で、指導案に沿って模擬授業実施。 はじめに45分案を作成しその後30分案へ改正 代表3名による模擬指導、すべてのグループで実施
平成18年度	〈第1学年第2学年〉 学習指導案作成 題材をリズムに設定し全員が学習指導案を作成 〈第3学年第4学年の歌唱指導〉 クラスを8つのグループに分け1グループ1楽曲の歌唱共通教材の教材研究を行い以下のような目標を明確にして、段階を追って模擬指導をおこなう。 目標1・教材を解釈することでこの楽曲の背景を知る。 目標2・教師自身がどのように演奏したいかを考え演奏。 目標3・児童に指導する際どのようにおこなうか (模擬指導)

平成16年度では、学習指導要領をまずすべて学習し、小学校の音楽の歌唱教材を各学年1曲ずつ学習したうえで、学習指導案の作成をおこなった。指導案作成経験がないため指導案自

体の学習に時間を十分にかけ、全員が指導案作成を経験した上で代表者による模擬授業を行った。指導案作成に多くの時間を割いたことで、指導案を作成することの効果はみられたが、実際の指導に当たる学生が少人数であったことは今後の課題となりえた。

平成17年度にはさらに効果的に模擬授業への取り組みをおこなえるようにするため、学習指導案作成から指導への流れを取り入れた。30分案という短い時間を設定し授業の全体の流れをグループより3名の代表者によって模擬指導を経験してもらった。多くの学生が体験するという点では非常に効果的であったといえるが、学習指導要領・学習指導案・細案など一連の流れを長期間で行うことにより、感想の中には内容の難化を感じる学生もあった。

平成18年度には、これらのことを踏まえさらにこの形態をさらに、まず実際の指導の前段階として、十分に学習指導要領の学習を行い、〈第1学年および第2学年〉のリズムについて授業の導入を実際に複数回経験したうえで、リズムに関する学習指導案を作成、さらに細案へと発展させ、発問などの実際の声かけについても指導案の中に織り込んだ。この時点で学生は初めて音楽科の学習指導案を書く体験をするのであるが、多くの疑問や実際にどのような言葉をしようすると伝わるのかなど、具体的に考えることができ、少しずつ指導の流れを創造して思考することができた。さらに〈第3学年第4学年〉の実際の歌唱発表を行うという流れを組んだ。これは、同時に学習指導要領・学習指導案・学習指導細案・歌唱指導経験などが重複するのをあえて避けたのである。

ここではまず第1に教材研究をグループにより行い「このような楽曲だからこう歌いたい」という姿勢を最終段階では歌唱と解説を10分以内で表現することを要求した。この姿勢は大変学生には効果的であったと思われる。これは前項でも述べた「教師はどのように歌いたいと感じている」「児童にはどのように歌ってもらいたいのか」「このような楽曲だからこのように歌いたい」を教師となる学生自身にもあじわ

ってもらいたいと考え投げかけたのである。その後グループ発表を行い「この部分はこのような音だからこう歌いたい」「この歌詞は一番重要だからこのような声で歌いたい」など具体的説明を行った上で歌唱発表をした。歌唱発表をおこなったうえで、部分的指導経験に移行した。15分間という時間で楽曲指導を学生全員が体験することができた。学生のほとんどはこれまで指導経験は無かったが、授業という大きな枠組みでなく、自分たちが十分に研究した楽曲であるために、指導のポイントが押さえられ児童に伝えるという模擬的指導経験を持つことができた。前年の一連の流れの長期化を避けることで、学生も学びやすく取り組みの深まりも見られ効果的であった。

指導体験に関する流れは以下のようなものである。今回は歌唱共通教材の第3学年第4学年に関して実施した部分である。目標を以下のように背景の理解・表現・模擬指導の3点に分け実施した。

- ① 楽曲に対する背景などの理解 (教材研究)
- ↓
- ② 教師はその楽曲についてどのように演奏し、表現したいのか。(表現体験)
- ↓
- ③ 子どもたちにはどのように指導し、理解したものをどう表現してほしいか。(指導体験)

<具体例>

① 教材研究

第4学年歌唱共通教材「とんび」

- ・ とんびはゆったりと飛ぶ
- ・ ピンヨローと鳴く
- ・ 1番の歌詞は願望、2番は実際の様子
- ・ 1回目、2回目、3回目、4回目の鳴き声が違うのではないかと距離感を感じる
- ・ 風景を感じる
- ・ 作詞作曲者について

↓

② 演奏体験

- ・ ゆったりとした声を出すには大きく息を吸いブレスのあるところまで歌詞を十分に歌う。
- ・ 4小節の中にクレッシェンドデクレッシェンドをつける
- ・ 1番は願望がこもっているので願いを込めて、2番は情景を表している。
- ・ 鳴き声については1回目のピンヨローは近く、2回目は遠く。同様に3回・4回も工夫する。この表現のためには音の大きさの工夫が必要。
- ・ 音が高くなるとき音を大きく

↓

③ (指導体験)

特に上記の2点について指導

- ・ 「飛べ飛べ」「鳴け鳴け」という言葉をはっきり願いをこめて。
- ・ 「飛ぶ飛ぶ」はゆったりと「鳴く鳴く」はなめらかに。

1回目の鳴き声は近い距離感のため大きく2回目は空を旋回して遠くにすんだので小さく歌う。

## 3. 専攻科初等教育専攻2年の取り組み

[表3] 実施内容

年度	内容
平成15年度	模擬授業 ディスカッション 感想
平成16年度	模擬授業 ディスカッション 評価 感想
平成17年度	模擬授業 ディスカッション 評価 (児童と教師) 感想
平成18年度	模擬授業 ディスカッション 評価 (児童と教師) 感想

専攻科2年次では後期に音楽科学習指導案を作成し、模擬授業を行っている。専攻科の学生は短大2年次にも音楽科指導法のなかで、指導案の書き方や、模擬的指導経験をもっている。専攻科2年では学習指導案の作成の際、題材の設定、授業時間の設定、観点別評価について等詳細についても作成し、模擬授業の実施、授業後のディスカッション、教師の目から見た評価、学生の中から見た評価を取り入れている。学生は、音楽日記という感想を書き、授業者の取り組みに関しての評価、自身に対しての自己評価をおこなう。これらを経験することで、自身が指導する立場になったときどのような準備が必要で、どのくらいの時間を要するのかということも経験できる。

これまで過去3年間に提出され模擬授業をおこなってきた学生の指導案の作成において、第1回目提出の時次にあげるような特徴がみられた。

①活動のみに終始	本時の流れが、曲を聴く、音をとる、あわせるなど活動のみに終始し、題材との関連を持つことなく活動を終えて本時を終えている。
②本時目標との相違	本時の目標に掲げていることと活動内容にずれが生じている。
③発問の不明瞭	「どうかんじた」「どんな風」など不明瞭な発問の多様。
④指示的言葉の多様	「うたわせる」「きかせる」「かかせる」など指導上の留意点に指示語を多様。一方的指導のありかた。

①は題材との関連性のない授業設定を構築し、結果楽曲の音取りやグループ練習活動のみに終始してしまうケース。多くの授業の中にはこのような時間もありうるが、模擬授業を1時間設定する際、題材との関連を視野にいれて本時を計画して欲しい。②は本時の目標と授業内容のずれであるが、これは授業がうまくいかな

いケースによく見られる。目標が明確でないために授業内容の達成が見られない。歌詞理解を目標に掲げているのに、歌詞の読み込みや意味理解などの活動が浅い。③は児童がどのようにこたえたらよいのか不明なケース。発問が曖昧で教師が何を尋ねているのかわかりにくい。そのため発問した側もその答えから何を導くのか明瞭でない。楽曲を鑑賞して「どうだった」などの発問は非常に多い。④は指示語の使い方であるが、教師が児童に対して「～させる」という授業の進め方の多様は教師と児童の関係構築の上からも、授業をともに作り上げていく姿勢からも、また評価の観点のとらえ方からも考える必要があるだろう。

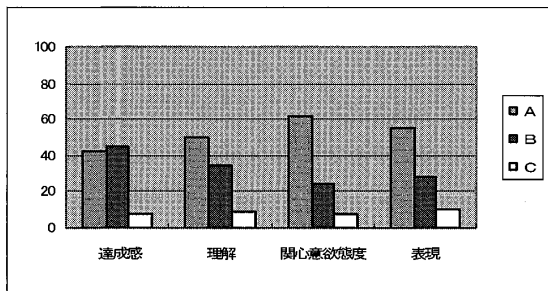
これらの点を学習指導案作成の際熟考し、何度も書き直し、実際に模擬授業に臨むまでに何度もシミュレーションを繰り返し、授業準備も綿密に各人が行う。授業後のディスカッションでは細部に渡り、話し方から掲示物の貼り方、板書の仕方など児童に扮した学生からのさまざまな意見をもらう。最後に17年度からは音楽日記という感想と評価の提出を行っている。その内容はそれぞれ自身の取り組みについて「達成感、理解、関心意欲態度、表現」の4点について指導要録記入の評価に即して「A十分満足できる Bおおむね満足できる C努力が必要」で評価し、また模擬授業を実施した人に対する評価として「明確、意欲、教材研究の内容、準備物」について同様に評価を行い、評価経験として授業者は児童に対する評価も行った。その他については自由記述とした。

## 〈音楽日記の提出 (74枚回答)〉

[表4] 学生自身の取り組み(%)

評価内容	A	B	C
達成感	41.8	44.6	8.1
理解	50	35.1	9.4
関心意欲態度	62.1	24.3	8.1
表現	55.4	28.3	10.8

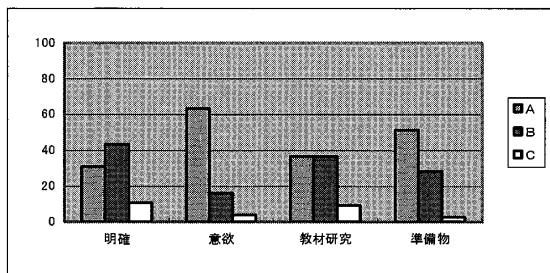
【グラフ 3】



【表 5】 授業者に対する評価 (%)

評価内容	A	B	C
達成感	41.8	44.6	8.1
理解	50	35.1	9.4
関心意欲態度	62.1	24.3	8.1
表現	55.4	28.3	10.8

【グラフ 4】



学生自身の取り組みに対する評価としては、「関心意欲態度」については突出してAの評価が多かったが、「達成感」ではBの評価が上回った。また授業者に対する評価では「意欲・準備」に対しては評価がよいが、教材研究の深さ、授業や言葉の明確さではBの評価が上回った。これらの結果から考察すると、意欲や準備と授業実践の部分ではやはり違いがあり、授業者が考え取り組んでいる授業と、受ける側の感じ方には相違がみられる。詳細をみてみると言葉かけの曖昧さや指示の不明確さなど授業者が内面で考えるものが表出した時に伝わっていない点が多くある。指導案や教材研究に十分時間をかけ、授業構築しているが実際に授業形態をとってみると児童に伝わっていない。模擬的指導を経験することで児童がどのような点に疑問をもつか、どのような発問は理解しにくいのかな

ど具体的な面が多く見えてくる。自由記述の感想の中にも「自分の指示がこんなに曖昧と思わなかった」「子どもたちをとまどわせてしまった」「子どもたちの声が少しずつ出始める感覚がわかった」「自分の考えている以上の意見が つぎつぎ出てとまどった」「子どもの様子を見ながら演奏するのが難しかった」という意見があった。自分の授業を見直し、自身を評価すること、子どもたちを評価することでフィードバックした自分の授業に戻ってくるという経験を持つことができた。

#### IV 今後の方向性

本稿では音楽科授業における模擬的指導の経験について実践例をあげその取り組みについて紹介した。学生は音楽の実技的内容にも不安点はあるが、実際の指導についても不安を多く抱えていることがわかった。それらを解決していくためには、教師としての経験を積むことがもっとも重要であろうが、模擬的指導経験を持ち工夫した授業構築を考えることでこれから教師となっていく学生にひとつの糸口をあたえることができ、また将来は自身でどのように工夫すればよいのかを考えるヒントとなればと考えている。模擬的指導、評価を経験をしてみるということの重要性を非常に感じている。また音楽科という教科の中で児童が表現することをいかに楽しく豊かに経験できるかということは教師の力量に大きく関わっているのである。創意工夫を求められ、思考判断を求められ、そのような経験から指導の道筋が見つかるのであって、決して技術や知識だけではなく感性の実体験による実感も重要であろう。

#### 〈引用文献〉

- 1) 『初等教育資料』 文部科学省教育課程・幼児教育課編集 No.799 2005 pp39~46
- 2) 『審議経過報告 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 平成18年2月13日』 pp28
- 3) 『音楽教育論—子供・音楽・授業・教師—』 教育芸術社 小原光一・山本文茂監修1996年 pp272

- 4) 『生成を原理とする 21世紀の音楽カリキュラム  
幼稚園から高等学校まで』日本学校音楽教育実践  
学会 [編] 東京書籍 2006年 pp56

〈参考文献〉

- 『小学校学習指導要領』文部省 平成10年  
『音楽科授業の指導と評価 評価が変わると授業も変わる』音楽之友社 福井昭史 2004  
『初等教育資料』文部科学省教育課程・幼児教育課編集  
No.787 2004  
『音楽授業における楽しさの仕組み』学校音楽教育実  
践シリーズ4 日本学校音楽教育実践学会編 2003  
『これからの音楽教育を考える 展望と指針』山本文茂  
音楽之友社 2006  
『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』  
アルベルト・オリヴェリオ著 川本英明訳 2005